

英領ボルネオではミリ油田とセリア油田との中間に在るルトンと云ふ所に製油所が建てられてあるが、其の能力は不明である。ルトンは遠浅であるため約三千六百米の海底送油鐵管が布設され輸油船に送り込むやうにしてある。

ジャヴァ島ではストラバヤ港の郊外ウオノクロモに東部ジャヴァ油田の産油處理の製油所がある。能力は一日約三百甕、バタフセー系のものである。此の製油所は一八八八年に設立された東印度最初のものである。中部ジャヴァ油田産油處理用としては、バタフセー會社は油田の中央に當るチェプーと云ふ所に製油能力一日約二千甕の裝置竝に一日約八百甕のダブス式分解蒸溜裝置を持つて居り、コロニヤル會社はチェプーの西南五哩のカプーアンと云ふ所に一日約七百甕位な小製油所を持つて居る。

スマトラ島では中南部油田の産油を處理するためにバタフセー會社はバレムベン市街の下流三哩の東岸にあるブラディユーに大製油所を備へて居る。一日の處理能力は約四千甕で、各個の油田から鐵管で石油を集めて居る。従つて南部油田の最も遠いものは百四哩もあり、又中部油田即ち蘭領印度石油會社に屬するものも凡て此處に集まるが其の距離は百五十七哩にも達して居る。最近、此の製油所も擴張が行はれ、新設備が加へられたところであるが内容は不明である。一方、コロニヤル會社は前記のブラヂュー製油所と小川を距てたスンゲイ・ゲロンに一大製油所を設け、南部油田の産油を處理して居る。處理能力は一日五千五百甕であるが、外に能力二千五

百甕の分解蒸溜裝置を持つて居る。油田はタラン・アカル外二油田であるが、其の間約八十二哩あり、六吋及び八吋鐵管が一本宛敷かれて居る。

北部スマトラ島油田に對してはバンカラン・プランダンに製油所がある。此の製油所はバンカラン・スースー港から約十三哩、ベブラン河に依つて連絡して居る。此處の製油所は一八九二年に建設された東印度に於ける第二番目の製油所でローヤル・ダッチ會社の發展の基礎となつたものである。一日の處理能力は約二千甕である。此の外、北部油田中の北部、パーラックに製油所がある。これは北部油田のものは夥しく多量にガソリンを含む故に、ガソリンを荒引するを目的として居る。そして處理されたものは凡て鐵管を以てバンカラン・プランダン製油所に送られて更に精製されるのである。

セラム島には三百五十甕位な荒引裝置があつて、荒引を行つた上、バリク・ババンに送られて居る。

次に南洋の石油は何れの方面にどれほど輸出されるかを檢べて見よう。これには北米合衆國政府の統計があるから、之を基礎として計算して見よう。先づ蘭領の方から見ると、一九三九年度に於ける蘭領東印度の消費量は約百四十萬甕、船舶燃料として使用される量が約四十萬甕、従つて蘭領東印度で輸出される正味の量は約六百十萬甕となる。之等の仕向地は東は濠洲及び新西蘭土、西は歐羅巴及び阿弗利加方面、北は東亞大陸と其の附近の群島と云ふやうに、其の位置が形勝であるだけに大いに手廣く各地に送り出されて居る。而して之等各方面に仕

向けられる石油の量の内、蘭領の港から直接に出るものは相當確實なものが判明するけれども、スマトラ島の如き港の不良な方面のものは小船で新嘉坡附近の小島の油槽所に運ばれた上に各地に運ばれる故、仕向地への量が明白を缺く憾みがある。依つて統計家の想像に従つて査定して見ると次のやうな數字になる。

歐羅巴方面	一、三〇〇、〇〇〇
阿弗利加方面	四〇〇、〇〇〇
東亞大陸（印度も含む）及群島方面	三、四〇〇、〇〇〇
濠洲方面	一、〇〇〇、〇〇〇
合計	六、一〇〇、〇〇〇

次に英領ボルネオの産油は少量の地方消費量を除き、他は凡て東亞大陸方面に行くものと見て宜しい。今や歐羅巴戦争酣なるため、現状は歐羅巴及び阿弗利加方面には仕向け不可能乃至は危険となつて居る。従つて百七十萬噸位は仕向不可能となつて停滯して居ると見て可い。

東印度石油業發達略史

創始時代 南洋の島々の中に石油の滲み出して居たことは、白人の南洋侵入と同時に傳へられ出したものであ

る。併し南洋の石油が眞に世人の注意を惹くに至つたのは一八六〇年以後、即ち米國に於ける石油業興隆の影響を受けるに至つてからのことである。これがため政府も調査研究を志し、民間にも探掘を試みる者が現はれて來てゐたが、眞劍に石油探掘を目的とした會社の出現したのは一八八八年であつた。其の會社の名はドルチェ(Dordtsche) 石油會社で、此の會社の創立者は蘭印政廳の鑛山技師のスタッフ(A. Stoop)であつた。これが南洋に於ける最初の石油會社であつたのである。この會社はジャヴァ島の東端に近きスラバヤ港の郊外に試掘を始めたが、幸にも淺くて出油したので直ちに製油所を建設して燈油の製造並に販賣を開始した。産額は一八八九年に三百噸、翌年には千三百噸と記録に残つて居るが、これなどは南洋に於ける産油の最初の記録である。こんな有様でドルチェ會社は最初から調子が可くて、立派に利益を擧げて行くので、他の石油會社の出現を促すことになつたのである。而して此の會社は年と共に發展して、一八九三年には今日、中部ジャヴァ油田と呼ばれる方面にも油田を開拓するに至つた。

然るところスマトラ島の北部に於てもチイルケル(A. J. Zijlker)と云ふ一農園主が或る川邊に石油の滲み出して居る場所を發見して、一八八五年に探掘を試みて成功せず、其の儘になつて居たがジャヴァ島のドルチェ會社の成功に鑑み、和蘭の實業家ケスラー(J. R. Kessler)の應援を得て一石油會社を創立した。それは一八九〇年のことで、其の會社の名はコンインクリーク石油會社(Koninklijke Maatschappij tot Exploitatie van Pe-

roleum-bar men in Nederlandsche-Indie) と云ふのであつたが、之を英語に譯せば Royal Company for Working Oil-Well in the Dutch East Indies となるが、之が世に謂ふローヤル・ダッチ Royal Dutch 石油會社であるのである。最初の試掘地はチイルケルが最初の採掘を試みた場所で、今日の北部スマトラ油田地域としては南端に近い方面である。此の會社はドルチエ會社とは反對に最初から不幸続きで、一八九四年に初めて利益を挙げ得たと云ふ有様であつた。其の不幸の内には會社創立早々から社長のチイルケルが死去したため、ケスラーが和蘭から來て、自ら經營に當るに至つたと云ふやうな事件もあつた。此のケスラーの社長就任はローヤル・ダッチ會社が世界的の大會社となる素地を造ることになつたのである。

ローヤル・ダッチ會社が北部の油田を開きつゝあつた時、今日謂ふところの南部スマトラ油田地域、即ちバレンバン州の石油地も一八九七年頃から數個の石油會社が組織されて油田開發を始めた。

産油増加と經營難時代 　こんな有様でジャヴァ島に於ては東部、中部、スマトラ島に於て北部、南部等の油田開發が進捗するに従つて産額も増加し、一八九四年には南洋全體としては十萬噸を超え、更に九七年には三十萬噸を超えるに云ふ勢であつた。併し當時は石油は單に燈火用にしか使用されない時代で、且つ貧弱な南洋土人對手では需要額も大したものではない上に、既に米國産燈油の販路も確定して居たため、南洋産石油の急激増加は忽ち掘け口の逼塞を感じるに至つたのである。かうなると外からは米油の壓迫、内からは南洋の石油會社間の競争が

激烈となるのは當然であつて、南洋の石油會社は何れも苦しい立場に置かれたものである。

此の時に當つてローヤル・ダッチ會社では、此の難局に處するため一八九六年一人の青年を儲ひ入れた。この青年こそは後に世界石油界に名を成したヘンリー・デターディング (Henri Deterding) であつたのである。而して一九〇〇年、ケスラー社長の死後、ケスラーの遺言に依つて年齢三十五歳のデターディングはローヤル・ダッチ會社の社長に就いたのである。二十世紀に入つてからのデターディングの活躍は後で紹介することとして、其の前にボルネオ島の油田開發事情を説明して置き度い。

ボルネオ油田の成功 　今日の南東ボルネオ油田即ちサンガ・サンガ油田は一八九六年に和蘭の鑛山技師メンテナ (C. H. Menten) が試掘を敢行し、僅か三十米で豊富な油層を發見したことが開發の端緒となつたのであるが、一八九八年、資金の關係からメンテンは英吉利商人サムエルの經營するセル運輸商會社 (Shell Transporting & Trading Co.) に全部の權利を譲渡してしまつた。かくして豊富な資金を得た該油田は急速な發展を示した。之に次でタラカン島でもローヤル・ダッチ會社は試掘に成功して一九〇五年から産額を記録するといふ有様で、ボルネオ島の産額はスマトラ及びジャヴァのそれを合せたものを凌駕する勢を示すに至つた。

一方ではジャヴァ、スマトラの産油が増加する上に新らしくボルネオの南北油田のものが加はつて、南洋全體の産額は一九〇四年には百萬噸を突破し、一〇年に百五十萬噸を超える勢であつた。かうした産油の激増は南洋

産石油の亞細亞大陸方面への進出を餘儀なくして來たのである。併しその方面には米油、露油の販賣網が設定されて居つて、之れに喰ひ込むことは容易でなく、殊にスタンダード會社の如きは意地悪き壓迫を加へて南洋の石油會社共を大に苦しめたものである。若し南洋の會社が經營宜敷きを得なかつたならば、スタンダード會社の追撃に遭つて、彼の資本下に降服されてしまつたに相違ないのである。スタンダード會社としても隆々として昂進する南洋油田を自己のものとしたかつたのである。

諸會社同時代 この状態を見て奮起したのはローヤル・ダッチの若き社長ヘンリー・デターディングであつた。彼は南洋の諸會社はスタンダードに較べてあまりにも小さく且つ弱體である。併し弱者も團結すれば強くなり得る。吾々は一致協力して大敵に當らねばならぬと、一九〇三年には先づ和蘭系の諸會社を糾合して亞細亞石油會社 (Asiatic Petroleum Co.) を組織し、更に一九〇七年一月一日には英吉利資本のセル會社と合併してローヤル・ダッチ・セル團 (Royal Dutch Shell Group) と稱する強力な會社を造り上げた。かくして外はスタンダード會社に對抗して販路を擴張し、内は南洋油田の權利を保全すると同時に限りなき富源の開發に力を盡したのである。「團結は力を生ず」(Co-operation gives power) は實に當時のデターディングの信念であつたのである。然かり而してローヤル・ダッチ・セル團の當事者達は南洋油田を一手に收め、之を踏臺として全世界の油田への進出に向つたのである。デターディングの謂へらく「吾等の舞臺は世界なり」(Our field is the World) と。今やローヤル・ダッチ・セル團は世界各地に油田を持ち、世界産油の一〇%を所有して居る有様である。要するに蝸牛角上に競り合つて居ては決して大事は成し得ない。彼等の大同に就く寛容な態度には大に學ぶべき點がある。

尙ほローヤル・ダッチ・セル團は南洋油田の經營に對しては、二つの大きな子會社をして之れに當らしめて居る。即ち産油並に製油に對してはバタフセー石油會社、販賣並に運輸に對してはアングロ・サクソン (Anglo-Saxon Pet. Co.) を之に當らしめ、之等二會社は更に多數の子會社、孫會社等を造つて盛に各方面に活躍させて居るのである。日本に在るライジング・サン石油會社の如きも、右のアングロ・サクソン會社の孫會社か會孫會社位に當るであらう。

スタンダード系會社の出現 以上の如く一九〇七年以後、蘭領に於ても英領に於ても油田の全部はローヤル・ダッチ・セル系の獨占で、吾が世の春を誇つて居たものである。因に英領ボルネオに於ける開拓もバタフセーの子會社に依つて行はれ、ミリー油田は一九一二年から産油の記録に現はれて來たものである。

然る處、スタンダード會社系も何とかして南洋油田に割り込まんと久しく機會を窺つて居たが成功せず、漸く一九一二年に至つて始めてニュー・ジャージーのスタンダードが數ヶ所の鑛區を手に入れて一石油會社の創立を許された。其の會社は普通にはコロニヤルと呼んで居るが、眞の名は *Nederlandsche Kolonial Pet. Mij.* である。

ある。該會社は直ちにボルネオ、ジャヴァ、スマトラの三島に於て試掘を開始し、七年を経過したけれども全體を合せても年額數百瓩と云ふ程度しか石油が得られない有様であつた。依つて一九一九年には事業中止を思ひ立ち、鑛區一切を日本の石油會社に賣り渡すことを決心した。此の賣買の交渉は翌年まで繼續し、順調に進捗して居つたが、南部スマトラ油田のタラン・アカルで最後の一本として試掘中であつた油井が千數百米の深度で良好な油層を發見したので、事業は復活繼續となり、賣買は自然と中止となつてしまつた。而して會社は更に深層の油量を確めるために第四號と云ふ新井を開鑿し、一九二二年一月には其處に大量の石油のあることを確認して送油鐵管の布設、製油所の建設に取りかかり、それ等の竣工を待つて一九二七年から採油し始めたのである。此の油田は昨今六十萬瓩以上の年産額を持つて居る。此の成功に鑑み、此の會社は淺掘で成功しなかつた附近の鑛區に深掘を試み、悉く成功して現在では年産二百萬瓩内外の量を維持して居る。不思議なものは人の運命ばかりでなく油田の運命も左様である。今日二百萬瓩を持つて居る之等の鑛區は一九一〇年頃に試掘した上、駄目だとしてバタフセー系の會社から放棄されたものであるが、これをコロニヤルが拾得して失敗し、更に日本に賣り渡さんとしたものが、最後の瞬間に深いところで石油が現はれ、南洋油田中最も優勢な油田となつたなどは、全く奇しき運命である。それは兎も角として、之を買ひ損なつた日本こそ全く可哀相である。

右の油田の成功に勢を得たコロニヤル會社は、廣大な鑛區を手に入れて大いに試掘を行つて居る現状である。

チャムビー油田の開拓 コロニヤル會社はバレムベン州油田に成功せず焦慮して居る時に、隣接のチャムビー州に廣い有望な地域のあることを知り、之を手に入れようとしたがローヤル・ダッチに全地域を奪取されてしまつた。前に話したやうにコロニヤルが事業中止を思ひ立つたのは、チャムビー州の鑛區獲得に失敗したことも重要な原因であつたとも云はれて居る。此の問題では英吉利政府も應援して和蘭政府を動かさし、結局はローヤル・ダッチと和蘭政府とが合同して一會社を造り、同州の油田全部を開拓させることにしてしまつたのである。此の會社が前にも説明した蘭領印度石油會社である。該會社の設立は一九二一年に和蘭の下院、七月には上院を通過して十二月四日に許可となつたものである。資本關係等に就ては既に紹介した通りである。而してチャムビー油田では一九二四年に一油田が開かれた以來、緩慢ではあるが確實に産油を増加して居る。

以上は南洋油田の略史であるが、調査完了地域の優良地域はバタフセー、コロニヤル及び蘭領印度石油會社で殆ど優先的に占領して居る。其の他の會社は其の殘餘を拾ふか、然からずんば未調査區域を得て調査から始めてゐる状態である。

データーディングの略傳

東印度石油業を物語つた序にデーターディングの略傳を附け加へて置こう。

デターディングがローヤル・ダッチ會社の社員となつたのは千八百九十六年五月十九日であつたが、此の會社に來る前に和蘭商會社の社員として數年前からスマトラ島に來て居たものである。前にも話したやうにローヤル・ダッチの社長ケスラーが會社の難局に善處するために彼を引き抜いて採用したのは、多分取引の關係からデターディングと接觸して居る間に、其の人爲を觀破して居たのであらう。古言にもある通り「名馬と伯樂」で、如何なる名馬でも伯樂が出て來なければ駄馬として一生を終ることもある。デターディングもケスラーの拔擢を受けるまでは平凡な一商會社の事務員に過ぎず、若し此の拔擢を受けなかつたならば彼も或は平凡な會社員として世を終つたかも知れぬ。

こゝでデターディングのそれ迄の生立ちを簡単に述べて見よう。彼は千八百六十六年、アムステルダム市に生まれ、市立商業學校を十七歳で卒業し、直ちに同市の一銀行の行員として働くことになつた。併し一向に頭が擧がらぬので殖民地稼ぎを思ひ立ち、商會社員としてスマトラに渡つた。と云ふだけのことで、別に立派な經歷ではなかつたのである。それにも拘はらず、ケスラー社長はスタンダード會社對抗の關手としてデターディングを選んだ。これは千八百九十六年の五月、デターディングが三十歳の年である。

ケスラーの眼識は少しも誤つて居なかつた。デターディングはよく時勢を洞察してよく働きよく關つた。従つてスタンダードと云ふ大敵を前にして社運は益々昂隆した。それだけに敵の壓迫も益々増大して來た。併し社長

のケスラーはデターディングを部將として奮闘して居たけれども、千九百年の春、蘭印から本國への途次、伊太利のナポリで急死した。デターディングの自敘傳中には、ケスラーの死は全く過勞だと嘆いで居る。而してケスラー自身にも豫感があつたらしくて、この旅に立つ前に「若し自分に萬一のことがあつたならば、會社の經營はデターディングに一任するやうに」と、同僚の重役に言ひ残して置いて居た。かくして入社して六年目、年齒三十五歳のヘンリー・デターディングはローヤル・ダッチ會社の社長に就任したのである。彼の自敘傳にも「こんな關係から私はあの見すばらしい銀行員を止めて十年もたぬ内に、一躍してローヤル・ダッチの社長となつた」と告白して居るが、かうした昇進は彼に取つては全く意外の世出であつたであらう。

千九百一年以後に於けるローヤル・ダッチ會社の活動は、凡てデターディングの方寸に基いたものである。彼の活動の主要は發達史の項に紹介した通りであつて、デターディングは遂に彼の會社をスタンダードを向ふに廻しての世界の二大石油會社にまで興隆發展させたのである。石油界で彼のことをナポレオン・デターディングと綽名して居たのも、宜なる哉である。

彼は千九百三十九年、數へ年七十三歳でロックフェラーと相前後して此の世を去つた。之等兩巨星が殆ど時を同じうして世を去つたことは、世界石油界に取つては急に寂寞を感じしめたものである。此の兩雄に就ては面白い挿話が傳へられて居る。それは曾て兩雄切對面のことであるが、ロックフェラーはデターディングに向て「貴

君の會社の名は何と申しましたか」と、天下のロイヤル・ダッチもデターディングも眼中にないと云ふ風に軽くやられたので、流石のデターディングも一本参つたと云ふことである。

東印度油田の將來

抑も和蘭には地質學に秀でたるもの多く、東印度油田の調査には夙くから力を入れ、現に油田地域となつて居る方面には相當廣大な面積の調査が完了されて居る。而して之等油田調査を検討する時、何人も試掘も經ざる背斜軸の如何に多いかに一驚を喫するであらう。例へば中部スマトラ油田即ちチャムビー州の油田地域には約五十本程の背斜軸が調べ出されてあるが、千九百二十三年以來、試掘を経たものは六本である。之等六本の背斜軸は全部出油して昨今では百二十萬噸の年産額に到達して居る。其の出油と否とは別問題として、此の如き運力を以て進むと假定すれば、殘餘の約四十四本に對して試掘を完了するには餘程の年數を必要とすることは敢て説明を要しないであらう。然かもそれ等の背斜軸は一般に長大であつて、十數哩程度のものは普通とされ、數十哩に達するものが少なくない事實を考へれば、其の要する年月の如何に劫大であるかは容易に想像し得るのである。而してチャムビー州ほど多數でなくとも、多くの油田地域には未だ試掘を經ない長大な背斜軸が澤山殘存して居るのである。然かり而して其の成功率に至つては上述のチャムビー州に於て六本試験して六本成功したやうな事實

は常に見らるべきでないとしても、此の地域では相當優良な結果が得られるものと考へて可いと思ふ。又他の油田地域に於ても過去の例から推しても優良な結果を見られるものと考へて可い。

次に未調査地域であるが、ボルネオ、ジャヴァ、スマトラ島等の現に石油を産して居る島に於ても、未調査地域は調査地域の少なくとも數倍はあらうと思はれるが、更にニューギニア島、チモール島等の如き方面を考へる時、未調査地域のあまりにも宏大であることに寧ろ嘆息を發したい程である。而して未調査地域は未知數中の未知數であるけれども、既に油田地域となつて居る方面の事實から推して、期待し得るものがあるのであるから、石油業者は此の方面にも大いに努力を拂はねばならぬのである。

最後に東印度に於ける既成の油田に對する將來の問題として殘されてあるものは深掘の件である。一般に東印度油田の地層は極めて厚く、其の間に屢々含油層が介在して居る。従つて深掘が可能であると云ふのである。但し例外もあるから一概には言はれぬが、大體にはかうした傾向があるのである。而して従來は比較的淺層採油に安じて居たが、最近深掘に志し、大なる成功を收めつゝあるのである。従つて既成油田の深掘實施に對しても大なる活動の餘地が石油業者に殘されてあるわけである。

要するに以上三點から考へて見て筆者は、最初に述べたやうに、東印度油田に對しては開發の餘地頗る廣大で、充分に希望を繋ぎ得るものと解して居るのである。

緬甸の油田

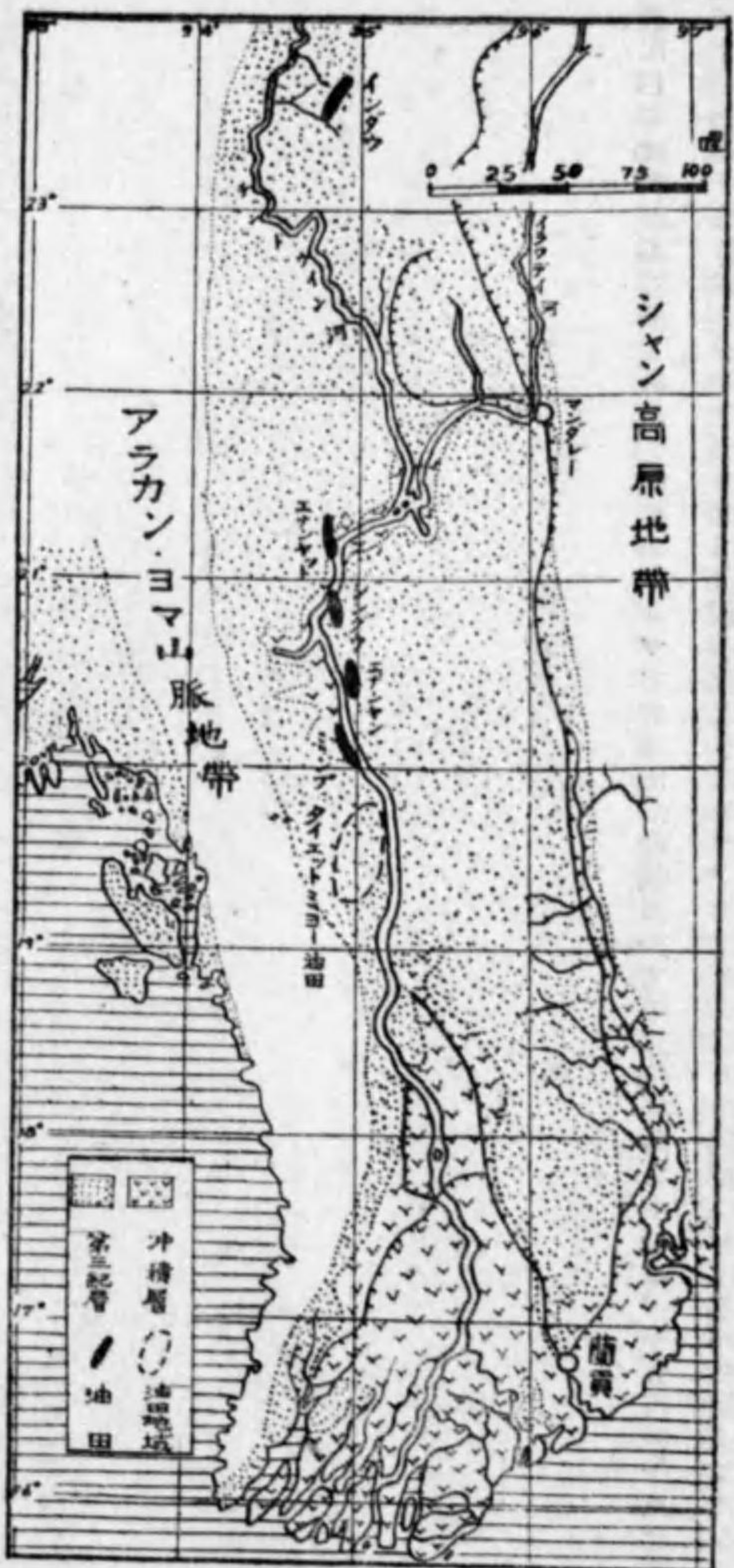
第二十一圖にも畫かれてあるやうに、緬甸には南北に走る二條の石油地帯がある。其の一は國の中央部を占めるもので、眞中にイラワディー河を挟む第三紀層から成立する地帯である。之を中央石油地帯と名づけて置こう。其の兩側は第三紀層よりは古い石油には關係のない地層から成る地域で、東側はシヤン高原地帯、西側はアラカン・ヨマ山脈地帯である。而してアラカン・ヨマ山脈の西の西側、即ちベンガル灣に沿ふて一帯の第三紀層から成る低地帯があるが、これが第二の石油地帯である。之はアラカン石油地帯と名づけて置こう。

アラカン石油地帯は印度に連続するもので、石油徴候は多數あるけれども未だ油田は成立して居らぬ。反之、中央石油地帯には夙くから油田が開かれ、今日では大小八個の油田が開かれ、相當な産額を示して居る重要な石油地帯である。

第一編に紹介したやうな面白い傳説を持つエナンヤウン油田は、蘭質港からイラワディー河に沿ふて過ること約三百哩で、河の東岸近くにあるものである。今もつて此の國石油業の中心地になつて居る。而してこの油田の北方にはシングウ、エナンヤイトの兩油田があり、南方にはタイエッチミヨで代表される數個の油田がある。之

等が現在の緬甸油田の中心であるが、南北に約百五十哩の間に殆ど一列を造つて成立して居る。此の外にエナンヤウン油田から約二百五十哩の北方に當り、チンドウイン河流域にインダウ油田がある。之等油田の最近(千九

第二十一圖 緬甸の油田



三 東亞共榮圏内の油田

百三十八年)の凡その産額を挙げれば左の如くである。

エナンヤウン	三、二二六、〇〇〇噸
シン グ ウ	三、四五二、〇〇〇
エナンヤット(ラニワを含む)	六二六、〇〇〇
ミ ン プ	八三、〇〇〇
ダイエットミヨ	七五、〇〇〇
イ ン ダ ウ	六八、〇〇〇
其 の 他	八、〇〇〇
合 計	七、五三八、〇〇〇

越にしては約百萬噸強である。因にエナンヤウン油田が産額に於て第二位に落ちたのは、千九百三十八年度が始めてである。これはエナンヤウン油田自體の減退もあるが、シングウ油田の發展の著しさが原因して居るのである。シングウ油田の著しい近來の發展は、本油田の重要性が最近に至つて知られ、採掘が盛んに行はれて居ることによるのである。

尙ほ油田經營資本は凡て英吉利系で、重なる石油會社は緬甸石油、蘭貢石油、印度緬甸石油等である。以上の内、

緬甸石油會社は千八百九十年に創立され、緬甸に於ける最初の白人の石油會社であつて、歴史も古く且つ最も有力である。此の會社はエナンヤウンから蘭貢港まで三百哩の間に十吋鐵管を布敷して産油を流送して居る。

以上説明したやうに、緬甸の油田は現在のところ中央石油地帯の西部に偏して殆ど一直線に發達して居る形である。併し同地帯の幅は平均百五十哩、延長七百哩以上に達して居るから、將來大いに研究の餘地があるわけである。同時にアラカン石油地帯に就ても、其餘地があると著者は觀て居る。

昭和十六年七月二十五日印刷
昭和十六年七月三十日發行

著者

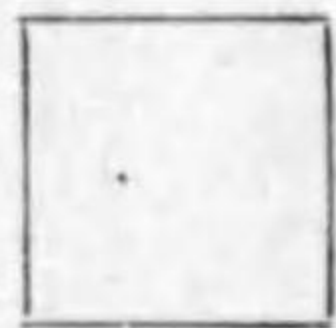
大 桃 一 藏

發行者

田 中 純
東京市京橋區京橋三丁目六番地

印刷者

堀 内 文 治 郎
東京市神田區三崎町二丁目二十二番地



發行所

日本出版文化協會會
員第一二〇五二五號

東 晃 社
東京市京橋區京橋三丁目六番地

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

科學 世界の油田
定價金二圓八拾錢

東京 堀内印刷所 神田

東 晃 社 刊 行 書

□書店に賣切れの節は本社に直接御注文下さい。
 □直接注文には振替御利用が御便利です。
 □振替用紙は郵便局に御請求下さい。
 □代金引換便は昨年来廃止されてゐます。

ホーラー・ベネツト著
 木原 通雄 譯

ヒンデンブルグの悲劇

頁〇八四列六四
 錢十二圓二價定
 錢十料送

六十七歳の退役將校から一躍前大戦ドイツの最高司令官に擧げられ、戦後には更にドイツ大統領としてヒットラーの出現を迎ふるに至るまでの榮譽と悲涙とに飾られた半生を語つたものである。生彩無類の筆致と正確な史眼とは、前大戦記録中の壓巻として、政界、軍部、文壇の絶讃を浴びて居る。

後藤 勇 著

南洋興亡史

附圖地列 6 B
 錢十八圓一價定
 錢十料送

世界最初の文化の華は先づ南洋に於て開かれた。而も今そこには非道なる搾取があるばかりだ。文化の華を摘み取つた者は誰だ。興亡五千年の哀史を白坂外務書記生の尅大なる踏査資料に典據して書かれたのが本書だ。史料の精確さと、その目的の純粹さとに於て、類書を凌駕すること百歩。

木原 通雄 著

日本政治の新秩序

頁〇二三列六四
 錢十八圓一價定
 錢十料送

滿洲事變以來の混沌たる我政情の中に一路新體制への足音を聞いて來た著者がその刻々の變化に即應して大膽に批評し、卒直に國民の進路を示したのが本書である。新體制は何故に生れねばならなかつたか？ その疑問に答へる唯一の良心的な途作。

澤木 興道 著
 信心銘提唱

本製上列 6 B
 錢十五圓一價定
 錢十料送

興道老師の名はすでに天下に著聞する。而も信心銘たるや、禪の極意を最も端的に卒直に説いた原典として、これ亦天下に著聞する。説く人と、説かれるものと、共に天下一品たる本書が、人生と禪との秘奥を語つて餘すところがないのは當然であらう。紛々擾々たるこの時代に一讀天地の秘義に參するの喜びに徹せよ。

近衛 文麿 述
 新政治研究會編

戦時下の國民におくる

頁〇〇二列六四
 錢五十九價定
 錢十料送

吾が多難なる時局下に二度も廟堂に立つて國民指導の重責に當つた公が、機に應じて國民に訴へた演説聲明談話を集録したのが本書である。國民的情熱の源泉がここにあり、全世界を傾聴させた新しき東亞の發言がここにある。新日本の理念と情熱とを識らんとするものもの是非とも座右に備へねばならない一書だ。

星野 龍猪 著
 回覽板

頁〇八二列六四
 錢十二圓一價定
 錢十料送

隣組の生命は實踐にある。全國の隣組は現に何を實行して居るか？ 全日本の隣組の模範的實踐例三百を網羅して、興趣豊かに翼賛奉公の精神と方法を説いたのが本書である。隣組實踐讀本として、廣く全國に讀まれて居る所以である。

川・カスバート・ハツドン著
 愛の樂聖傳

入眞寫列 6 B
 錢十六圓一價定
 錢十料送

パツハ以下世界の樂聖二十餘名の生活記録。——彼等の多彩なる愛情生活を通してその生活と作品との本質を把握せんとしたのが本書である。一見古風な戀物語の中に天才の苦惱と情熱とを語り、作品にまで華品された彼等の姿を描く。單に音樂の愛好家ばかりでなく、誰が讀んでも胸を打たれる哀傷の記録に満ちて居る。

神原 泰 著

戦争・石油

四六判上製本
定價一圓五十錢
送料十錢

石油を制する者は世界を制す。現代戦を遂行するものは國家であると共に石油である。「日本石油」調査課長その他の要職にあつて吾が石油業界の權威であると共に詩人、畫家、文明批評家としても高名なる著者がその蘊蓄を披瀝してこの題目に迫つたのが本書である。

中外商業新報評

近代戦に石油乃至石油資源が絶対不可欠の要件をなすことは言ふまでもないが、然らば近代戦に於ける石油消費量はどうか？これを如何にして供給するか？世界の石油資源の分布並に列國の資源は如何？また、戦時下石油事業の統制乃至管理はどうか？——等々の問題を具體的に、技術的に、系統的に、判り易く述べた著書は絶無ではないが、極めて稀である。本書の著者は多年に互つて石油問題に關する調査研究の實務に當つた實際家であり、またよく内外の關係文獻を遍く涉獵せる眞摯なる研究家であつて、本書は戦争と石油との關係、世界の石油資源、第一次大戦に於ける石油の役割、對伊石油禁輸問題、米國の對日石油壓迫、蘭印の石油問題等に關する正確な詳細な論述を通して、近代に於ける石油問題を殆んど悉く解剖批判して居る。(全文)

914
24

終

